

# 「土」——私の日曜農業——

近藤千恵子

「実りの秋の遠足には芋掘りがふさわしい」と、勝手に思いこんでいる私です。しかし、営業の芋畠では、蔓つるはすっかり取り除かれていて、これは本物の芋掘りではないと思うし、土の感触に興奮して走りまわる子ども達を叱って、やりきれない気持ちになりました。「そうだ。自分達でさつま芋を育ててみよう」と、迷いもせず日曜農業をめざしたのは、私自身、土いじりが好きだからです。パインジー、サルビア、葉鶏頭などの種子を蒔いてから花壇を彩るまでの楽しみは、保育と似たようでもありますし、反対に、今年失敗しても、来年を楽しみにすればよいという気楽さが嬉しいのです。広い空の下で風を聴き、無心になれる農業の喜びが、私を畠作りにかき立てていました。

美しい土

丸い熊手のような耘運機の爪が、回転を繰り返しながら進むと、土の中から新しい美しい土が顔を見せてきます。三月の風の冷たさが、まだ本当の春を納得させない頃、耕した土はほっかりと暖かく、耘運機を押しながら、土の中に生まれた春を感じる事ができます。暑い季節には、耕した土の冷たさが快くて、畠仕事の喜びは、手しおにかけた土と素足で触れることから始まるのだと言えま

す。その上、どこから見ているのでしょうか、小鳥たちが降りてきて、忙しそうに土の中から出た虫を啄つばんで飛とび去はって行く様子にみとれるのも、土を耕かした後の小休止の楽しみです。

### 母なる土

耕かした土に鍬くわをたててから、種子を蒔まいたり苗を植うえたりするのは、収穫を想像して胸のときめく仕事です。さつま芋の苗は根をもっていないものですから、五月の陽ざしの中で土にさすと間もなく、ぐったりと萎しおれてしまいます。花を育てる時であれば、じょうろでたっぷり水をかけてあげられるでしょうが、広い畠はたけにそんな作業は通じません。自然の雨を待つしかないとひらきなおって、次の週末に来てみますと、芋苗は畠はたけの上にびんと立っているではありませんか。無残に枯れているのは、畠はたけに入った犬や猫が土から出してしまったもので、土の中に抱かかかれていた苗は、もう小さい根を伸ばして生き始めています。母なる大地を感じる時です。

六月、七月の高温と多湿の中で、芋苗よりもぐんぐんと伸びる草のたくましさは、「雑草の如く育て」の意味を再認識させてくれます。ようやく八月の半頃、芋蔓いもづるは畠はたけの土をみえない程に覆おって繁り、私達を草取りから解放してくれました。

### 遊ぶ土

待望の芋掘り遠足には、収穫することの他にたくさん体験がありました。畠はたけの隅に芋蔓いもづるの大きな山ができる程、子ども達は畠はたけの中を行ったり来たりして蔓運びをしました。一本のお芋も掘らないで

虫捕りに夢中だった子ども、芋掘りを忘れて蟻の家を作った子ども、土をみて遊ばずにいられなかった子ども達の姿は、芋掘りにこだわろうとする私の気持ちを越えていたように思います。そして、どの子どもも、自分のリュックの中のお芋に愛着をもって家路につきました。

子どもたちに励まされ、土に魅せられて、私の日曜農業は続きそうです。

(まんとみ幼稚園)

## “土の匂い”を

飯島 俊勝

春の慈光の中に芽ぶく草花は、大地を割って顔をのぞかせる。子ども達と、昨秋、土づくりから始めて一緒に植えた、チューリップ、ヒヤシンス、クロッカス等である。草花に、新たな生命を与えた大地の地表は、雪、霜柱でズタズタにされているが、指先で、表面の土を少し除けてみると、黒々とした、冬の厳しさを吸収し、じつくりと力を蓄えた“土の匂い”があ

